

# 大学生における生活科研究の学びの実際

水野信輔\*

## 1 「生活科研究」とは？

本科目は教職課程科目の一つであり、「学校教育専攻」と「保育専攻（幼稚園一種免許所得希望者）」の2年生の学生を対象とした必修科目（2単位）である。今年度（令和4年度）の受講生は「学校教育専攻」学生が61名、「保育専攻」学生が49名の合計110名が受講しており、授業は両者混合で56名（ $\alpha$ ）と54名（ $\beta$ ）の2クラスに分かれている。

本科目の学修内容は「生活科の目標、内容、方法を理解し、具体的な活動を通じた教材研究を行い、生活科の学びについてのイメージをもち、学校現場で創意工夫のある授業を構想することができるようにする」ことであり、到達目標は【「身近な人々、社会及び自然に関わる活動」や「自分自身の生活や成長」に関する内容につながる活動を通じて、生活科学習における教師の役割や授業の進め方などを体得し、理論と実技を基に子どもの前で自信をもって指導できるようになること】である。

## 2 何を体験させるか？（実践単位について）

### （1）いくつの体験活動が可能か？

先の到達目標を達成するためには15回の授業の中でできるだけ多くの活動を学生に体験させるにこしたことはないが、平成29年告示の学習指導要領が提唱する「アクティブラーニング」を推進していくためには一つ一つの活動をしっかりと「振り返る」活動の充実が欠かせない。より深い学びを実現するためには、その活動の前後に「活動を見通す」時間と、「振り返る」時間をしっかり位置付けることが不可欠である。一つの活動を「活動を見通す」・「活動する」・「振り返る」という3つの時間を1セットとして考えると15回の授業時間の中で取り組める体験は4つ程度が妥当である。

### （2）どんな体験活動をさせるか？

3つの階層に分類される9つの内容のうち15回と限られた授業の中でどの内容を受けた体験活動を学生にさせることが効果的かは慎重に見極める必要がある。そこで以下の3点を具体的な体験活動を絞り込むポイントにした。

- 生活科らしさを実感できる体験活動であること
- 3つの階層から一つずつ取り上げること
- 春学期にしかできない体験活動であること

その結果、以下の4つの内容を受けた体験活動を取り上げることにした。

表1 授業で取り上げた単元

内容	階層	実践単元
(3) 地域と生活	1	家の周りを探検しよう
(5) 季節の変化と生活	2	小さな夏を見つけたよ
(6) 自然や物を使った遊び	2	動くおもちゃを作って遊ぼう
(9) 自分の成長	3	明日へジャンプ

\* 東海学園大学教育学部

### (3) どう体験活動させるか？（目指す学生の姿）

本授業では学生は教師という指導者としてではなく、あくまでも学習者として授業に臨ませることが大切である。今から15年ほど前にも学生は小学校で当事者として生活科学習を体験してきているが、この先、指導者として子どもの前に立ち生活科を指導する立場に立とうとする者にとって再度、この機会に自分が受けてきた授業を学習者として追体験することは生活科の本来持っている楽しさ、面白さを実感させる上で極めて大きな意義がある。生活科研究の学修を通じて、学生は生活科学習に懐かしさを覚えるだけでなく、子どもの頃には十分味わえなかった生活科学習の楽しさに気付いたり、子どもの頃とは違った新しい気付きを発見したりすることで生活科の本来持っている価値を再確認することができ、ひいては生活科が子どもの育ちに与える影響の大きさを実感として理解、納得することができる。と考える。（具体的な体験活動を経ずして、言葉だけでこうした点を理解、納得することは、言葉で伝えようとする以上困難である）

また、この授業では学生にはとりわけ「振り返る」活動の大切さ、よさを実感させたい。具体的な活動の質的な深まりは、その前後に位置付く「見直しをもつ」活動と「振り返る」活動の影響を強く受ける。創設以来、生活科が大事にしてきた「気付き」とは「振り返る」活動の中でこそ大きく伸長される能力である。自分が取り組んできた活動を振り返る視点は「自分から」だけでなく「他者から」の視点も含まれる。自分の取組を他者と相互に評価し合うことにより「気付き」は質・量ともに大きく変容する。こうした変容を実際に体験することを通じて、自らの成長（育ち）を実感させたい。

子どもの立場から、一つ一つの体験に傍観者ではなく当事者（主人公）として臨み、他者からの視点を自分の生き方に上手に組み入れていく、そうした姿をこの授業を通じて目指す学生の姿として掲げ、実践に取り組んだ。

表2 目指す学生の姿

ユニークで、ユーモアに富む子ども（学生）
----------------------

### (4) 指導計画

表3 春学期における15回の指導計画

1回	生活科の目標	9回	小さな夏を見つけたよ①
2回	生活科の内容	10回	小さな夏を見つけたよ②
3回	家の周り探検①	11回	小さな夏を見つけたよ③
4回	家の周り探検②	12回	明日へジャンプ①
5回	家の周り探検③	13回	明日へジャンプ②
6回	動くおもちゃを作って遊ぼう①	14回	明日へジャンプ③
7回	動くおもちゃを作って遊ぼう②	15回	スタートカリキュラム
8回	動くおもちゃを作って遊ぼう③		

## 3 実践单元について

### (1) 家の周りを探検しよう

実際の生活科の授業における探検活動の範囲は「学校」「通学路」「学区」が主であるが大学生にとっての家の周りは広範囲であり、学生間でもその環境は大きく異なる。このことはそれぞれの生活環境はユニークなものであり、それゆえ他者にあまり知られていない自分の生活環境はそれだけで他者の知らない「宝物」の宝庫となり、そうした自分の生活環境のよさを「宝物」として他者に伝えたいという強い動機付けが誘発されやすい。生活科研究の授業のスタートとして、自信をもって探検活動に臨むことができ、

その楽しさを十分味わうことが期待できる本単元を取り上げることは妥当であると考え。なお、コロナ禍における探検活動としては、とりわけ身の回りの「人（高齢者）」との関わりは極力避けるよう留意する必要がある。

本単元のねらいと学修の流れ、及び①活動の工夫、②実際の様子、③活動後の気付きは以下の通りである。

表4 本単元のねらい

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 身の回りの人や自然、施設などに関心を持ち、意欲的に家の周りがある「宝物」を探す。</li> <li>○ 探検を通じて感じたことや思ったことなどを探検記にまとめ、友達に分かりやすく伝える。</li> </ul> |
|---|

表5 本単元の学修の流れ

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;第1時&gt; 探検計画と探検記のタイトルを決める。</li> <li>&lt;第2時&gt; 探検をし、探検記にまとめる。</li> <li>&lt;第3時&gt; 探検記を相互鑑賞する。</li> </ul> |
|---|

### ① 活動の工夫

#### ア 探検活動はユニークな視点で！

探検活動を充実させるポイントの一つは、ある視点から身の回りにあるものの中から「宝物」を見つけ出させることである。これまで何気なく見過ごしていたものの中から他の人に紹介したい「自分だけの宝物」を発見させることが探検活動の面白さである。

そこでまず初めに色や音、匂いなどといった5感を働かせてそこから見えてくる「宝物」を探すよう指示した。5感是自己特有の感覚であり、たとえ同じ感覚器官を働かせてもそこから感じ取るものは自分独自のユニークなものであり、その子らしい探検活動につなげやすい。

#### イ 探検活動は記録とセットで！

どんな活動でもその活動をまとめる活動とワンセットにしないと、活動に深まりがなく表層的なものになりやすい。とりわけ探検活動はその場その場の瞬間的な活動に没頭しやすく、後で再現することがむずかしい。そうした探検活動の課題を解決するためにもその時々自分の感覚を通じて感じ取ったものは必ず記録に残すということが大事である。そうすることで「振り返り」活動を充実させることにつながるだけでなく、記録にまとめることを見越してこれからの自分の活動を修正することができるようになる。

#### ウ ユニークでユーモアのある探検記を！（タイトルとまとめ方で勝負！）

探検活動はその記録のまとめ方の工夫によって大いに深まっていく。探検記のまとめ方の工夫の一つとしてユニークでユーモアのあるタイトル作りに挑戦させることは、面白い探検活動に取り組ませる上で効果的である。

また探検記のまとめ方の工夫として、文字だけでなく写真やイラストなどを効果的に入れ込んだり、単なる事実の羅列ではなく、その時に自分が感じたことや発見したこと、面白かったことなども記述したりするよう例を示しながら伝えた。

#### エ 「よさ」は付箋で具体的に！

活動の取組の評価は相互評価を活かすことが効果的である。他の人の取組を直に見聞きすることで自分の取組を改めて見直すきっかけになることは多い。そのためにも他の人が自分の取組をどう見たかを本人が確認できるようにすることが自己評価の精度を高める上で効果的である。そこで本実践では「付箋」を使用しそれぞれの探検記の「よさ」を伝えるようにした。また他者評価が視覚的に把握できることも付箋

による相互評価のメリットである。書かれた内容もさることながら、何枚の付箋が自分の探検記に集まったかという期待感を容易に高めることができることも付箋使用のよさである。

② 実際の様子

ア 探検記のタイトル

探検記のネーミングに多くの学生は当初困惑気味ではなかなか面白いものが思い浮かばず悪戦苦闘していたが、探検を重ねる中でその子らしいユニークでユーモラスなタイトルが付けられるようになっていった。

表6 各クラスの探検記タイトル

αクラス	βクラス
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ぼくのガリバー旅行記</li> <li>○ 川の流りに逆らって</li> <li>○ 空を泳ぐ願いたち</li> <li>○ 空を見上げる力がないあなたへ</li> <li>○ 町の中にある文字たち</li> <li>○ 私の町は美術館!?</li> <li>○ 通学路であっ！ぷっ！ぷ～！</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 落とし物から広がる世界</li> <li>○ 動かない生き物図鑑</li> <li>○ 町は青色であふれていました</li> <li>○ 通学路のヒーローたち</li> <li>○ ちっちゃいもの倶楽部</li> <li>○ 名古屋市民なら「けったをこいで」</li> <li>○ 脇道散歩</li> </ul>

イ 探検記の各ページ



図1-1 写真を活用もの



図1-2 イラストを活用したもの

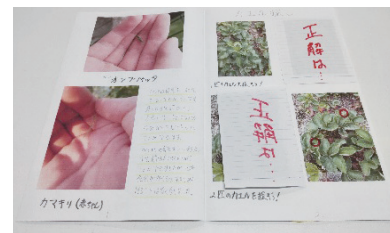


図1-3 クイズを取り入れたもの

ウ 付箋（相互鑑賞）

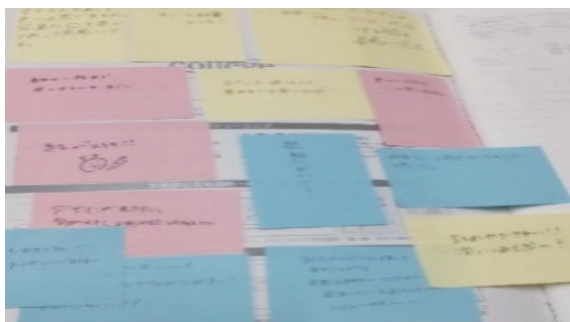


図2-1 文字や絵の美しさに着目したもの

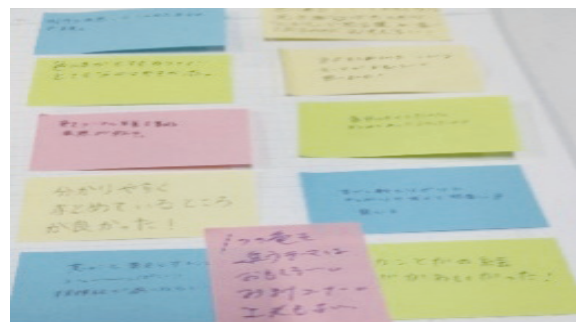


図2-2 まとめの見やすさに着目したもの

## ③ 活動後の気付き

表7 活動後の学生の気付き

- ・ 相互鑑賞することで「そんな視点もあったのか」と気付かされて勉強になった。
- ・ いつも見慣れた場所でも知らないことがたくさん発見できた。地域を見る目が広がった。
- ・ 同じテーマでもまとめ方や見方がこんなにも違うのかと驚いた。自分のまとめ方のいいところがなかなか分からなかったが他の人からのコメントを読んで自信がもてた。
- ・ 実際に何度も歩いて情報を探すが楽しくなった。だんだん探検の深みにはまっていった。
- ・ 自分の地域を知らない人に知ってもらえて嬉しかった。また付箋でいいところを探す活動も付箋の数を数えて、ここまで頑張ったよと達成感が得られた。
- ・ 探検は少し疲れたけど、主体的に行動できた気がしてとても充実した時間が過ごせた。こうした活動を子どもたちにも味わわせたい。
- ・ まとめ方を意識して作業は計画的に進めることが大切だということに気付いた。
- ・ 目的を決めてから活動に入ると多くのことが学べることに気付いた。感想だけでなく、どういふところが魅力的かまで書くと自分の思いが伝わるのが分かった。
- ・ 相互鑑賞があると、新しいアイデアや考え方が広がるのでこうした振り返り活動は大事だと思った。

など

- 探検活動を充実させるためにはある程度の時間を保障することが大切である。今回も第1時の後半から第3時に入るまでの時間を探検活動に当てたが、途中の第2時はそれぞれの地域での探検活動となるので、通常のように大学へ学生を集めることはしなかった。(全員「出席」扱い)

## (2) 動くおもちゃを作って遊ぼう

生活科におけるいくつかの体験活動の中でも「製作活動」は多くの子どもたちが好む活動である。子どもたちが好む理由の一つは、製作活動そのものの魅力の他に、生活科では製作活動を通して「友だち」と一緒に遊んで楽しく関わることを重視している点が挙げられる。

敢えて「動く」おもちゃにこだわるのは、動きの面白さを味わわせることの他に、動くおもちゃの方が友だちと「競争する」という関わり方がより誘発されるからである。

この授業に参加している学生は「学校教育専攻」と「保育専攻」という二つの異なる専攻生の集まりであるが、学生の様子を見ていると専攻を超えた相互の関わりはもちろん、同じ専攻内の者同士でも関わり方は弱くドライである。これはコロナ禍の影響で遠隔授業がほとんどで共に机を並べての大学での学修経験の乏しさもそうした関わり方に影響を及ぼしているかも知れない。ただそうした学生であれば余計に共に遊び合い、学び合う機会をこの単元を通じて味わわせることは教育的意義があるとも言えよう。ただ先の「身の回り探検」同様、遊ぶ場面においては密を避ける配慮は必要である。

本単元のねらいと学修の流れ、及び①活動の工夫、②実際の様子、③活動後の気付きは以下の通りである。

表8 本単元のねらい

- 身近な材料を用いて、比べたり、試したりする活動を繰り返し、より楽しめる工をしながら動くおもちゃ作りをする。
- 動くおもちゃ作りを通して、動きの面白さや不思議さに気付くとともに、みんなと楽しく遊ぶ。

表9 本単元の学修の流れ

<p>&lt;第1時&gt; どんなおもちゃを作るか計画する。</p> <p>&lt;第2時&gt; 動くおもちゃを作る。</p> <p>&lt;第3時&gt; 作ったおもちゃでみんなと楽しく遊ぶ。</p>
---

① 活動の工夫

ア おもちゃ作りは材料探しから！

この製作活動のもう一つのねらいは材料を身の回りの自分の生活の中から探し出すことである。生活科の「生活」とは自分の身の回りのことであり、自分という存在は身の回りの様々なもの（人や自然に限らない他者）と深く関わっていることに気付かせることが生活科の役割の一つである。生活科の学習は学校の中での活動だけではなく、身の回りの生活の中からおもちゃ作りに使えそうな材料を探すところから始まっていることに気付かせたい。生活科学習の入り口と出口は自分の生活の中にある。

イ 工夫は試行錯誤を繰り返すことで！

綺麗で見栄えのする作品を完成させることが製作活動の目的ではない。生活科が目指す子どもは工夫する子どもである。自分の生活を豊かにするには創意工夫が不可欠である。一旦は完成しても、さらにいろいろと改良しよりよいものを創り出そうと試行錯誤を繰り返すことを大事にしたい。動くおもちゃは壊れやすいので途中で動きが悪くなったり、競ってもなかなか勝てなかったりする場面こそ子どもの学びが大きく伸びるチャンスである。

ウ 新しい遊び方の創造を！

動くおもちゃを完成させてもいざそれを使って遊ぼうとしてもなかなか遊ぶ活動が始まらないのが現実である。中には自分が作ったおもちゃを何度も何度も自分で動かして楽しんでいる姿も散見する。学生にとって遊びは自然発生的には起きにくい行動かも知れない。そこで遊ぶ場面を創出するためにはまず同じ動力で動くおもちゃ同士をグループ化することが効果的である。そしてそうした遊びが始まった後、今度は動力が異なるおもちゃ同士のグループ化を図るとこれまでとは違った遊び方（ルール）を工夫して遊ぶようになる。（授業では磁石で牽引して走る自動車と風力で進む自動車を競わせて遊ぶグループが現れ、単なる速さ競争ではなく、決められた時間により近いタイムでゴールした車を勝ちにするといった新しいルールが生まれた）

② 実際の様子

ア 動くおもちゃのネーミング

自分の作品に愛着をもたせるには名前を付けさせるのが効果的である。今回は「動き」に着目させて、おもちゃの動きを表すオノマトペを取り入れたネーミングに挑戦させた。

表10 各クラスの動くおもちゃのネーミング

αクラス	βクラス
○ ピョンピョン飛行機	○ カタカタマリオネット
○ くるくるタコさん	○ ブーン飛行機
○ トコトコクリア戦車	○ カエルがピョン
○ ふにゃふにゃパラシュート	○ フワフワ玉落とし
○ ベローン	○ グラグラバランスボール
など	など

## イ 動くおもちゃ作品



図3-1 乾電池を利用したもの



図3-2 磁石を利用したもの



図3-3 輪ゴムを利用したもの

## ③ 活動後の気付き

表11 活動後の学生の気付き

- ・ 自分なりに試行錯誤を繰り返して工夫することが面白かった。
- ・ 予定と違う動きになったけど、あれこれ工夫したら違う動きになって面白かった。
- ・ おもちゃで一緒に遊ぶことで今まであまり関わらなかった人とも関われるようになって人間関係が進化した。
- ・ いろいろなおもちゃを見て、面白そうな工夫を真似したら前よりいいアイデアが広がった。
- ・ 友だちから自分のおもちゃを褒めてもらってとっても嬉しかった。
- ・ 作り上げた時の達成感が大切だと思った。
- ・ 一緒に遊んでいると、友だちのいいところがたくさん発見することができて嬉しかった。
- ・ 何よりも楽しもうとする気持ちが大切だし、友だちとの関係も前より深まった。
- ・ 違うおもちゃ同士で遊んだら、これまでと違うルールで遊ぶことができた。いろいろなルールを考えるのも楽しい。

など

- 今回どんな動くおもちゃを作ればいいのかを考えさせる際、教科書にある例や、これまでに作られた作品例などを提示したが、実際にはスマホを使って参考例を探す学生が多く見られた。学校現場ではありえないことだが大学における授業としてはこうしたスマホ利用はある程度やむを得ない現象であろう。

## (3) 小さな夏を見つけたよ

生活科は学習者が低学年であることから学習対象は目に見えて手で触れることができる具体的な事物であることが望ましいが、ここで扱う内容(6)では「季節の変化」といった極めて抽象度の高い学習対象となっている点で特異である。しかし、こうした抽象度の高いものが学習対象として位置付けられていることは単に学習の困難さを誘発するものではなく、低学年の子どもの「非認知能力」としての感受性を養うという点において極めて低学年にふさわしいものとなっていると言える。小さな子どもは視覚を除く他の受信感覚において大人を遙かにしのぐ高い精度を持っている。目に見えない「何か」を小さな子どもは敏感に、確実に感受する力を持っている。そうした「何か」の一つがここで扱う「季節の移り変わり」という変化である。また「目に見えない」という現象は何かがあるのに「隠れている」状態であるとも言える。鬼ごっこをはじめ、小さな子どもは隠れているものを見つけ出す活動が大好きである。こうした学習内容の特色を踏まえて、まだ大きく成長しきっていない、身を小さくしてこっそりとどこかに身を潜めている

「小さな季節」を見つけ出す活動として本単元を取り上げることにした。ここで扱う「小さな季節」は授業時期と合わせて「夏」とした。

本単元のねらいと学修の流れ、及び①活動の工夫、②実際の様子、③活動後の気づきは以下の通りである。

表12 本単元のねらい

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 身の回りの自然や生活の様子の中から、春から夏への季節の変化を5感を駆使して見つけ出す。</li> <li>○ 5感を駆使して見つけ出した季節の変化を絵日記にまとめる。</li> </ul> |
|---|

表13 本単元の学修の流れ

- |   |
|---|
| <p>&lt;第1時&gt; どこを探せば小さな夏が隠れているかを予想し、小さな夏探しの計画を立てる。</p> <p>&lt;第2時&gt; どこで、どんな小さな夏を見つけたか文章と絵で絵日記にまとめる。</p> <p>&lt;第3時&gt; 絵日記を相互鑑賞する。</p> |
|---|

### ① 活動の工夫

#### ア 探す活動は5感をフルに働かせて！

季節の変化という学習対象にしっかりと向き合わせるためにもここでは5感をフルに稼働させ、全身で季節の小さな変化を感受させることを大事にしたい。大人になるに連れ視覚に基づく情報の感受が主流となるがそれ以外の聴覚・嗅覚・触覚・味覚などからも小さな夏を感受させることが大切である。夏ならではの「花火」の音や「蚊」にさされた後に感じる痒さ、夏の日差しで高温になる車内の「ハンドル」の暑さなどの例を紹介しながら5感から伝わる実体験を基に季節の変化を見つけ出させたい。

#### イ 探す活動は本番前が狙い目！

隠れているものを夢中になって探すのは、隠れているものが簡単に見つからないからである。鬼に見つからないように上手に隠れている方が鬼ごっこは面白い。隠れている季節探しをする場合も同様である。夏が出現した頃に夏探しをしても、まわりのどこにも夏がいて容易に探すことができるが夏探しとしては面白くない。じっくりとその気になって目を凝らし、耳をそばだてなければ容易に夏が探せない状況でこそ、夏探しは面白くなるのである。とりわけ衣・食に関する情報は年々季節を先取りする傾向が強い。それ以外に花粉症対策の薬などは花粉症が蔓延する前から薬局に並ぶ。花粉症そのものよりも花粉症対策の薬の中に小さな夏は潜んでいる。こうした様々な生活場面でその季節到来前に見られる季節の兆しを敏感に感受できる感覚を養っていくことは、季節の変化を自分の生活の中に取り入れて自分の生活を豊かにしていくことに繋がるのである。

#### ウ 探したことを絵日記でまとめる！

先の「家の周り探検」でも探検した内容は「探検記」という形でまとめさせたが、ここでは記録として発見した事実を網羅してまとめるのではなく、一つのストーリー性をもった物語としてまとめさせたい。絵日記には出来事を累積していく記録性という機能もあるが、それにとどまらず取り上げた事象に対する自分の思いを焦点化するとともに（自分の得た気づきのどの部分を取り出して絵に描くかを決めることによって）、全体の枠組みの中の一部として組み入れ相対化する（自分の得た気づきを個々ばらばらなものとしてではなく全体を貫くテーマに沿った一部として文章に書くことによって）機能をもっている。

絵日記は描くことと書くことといった多様な表現方法を合わせ持っているが、こうした「焦点化」「相対化」を促す表現方法を身に付けさせることで、子どもの獲得した様々な「気づき」を「深い学び」へと繋げる役割も期待できるツールの一つであると考えている。（なお、自分の思いを焦点化して描く技法として、



ここでは触覚描法・同心円描法をはじめとする「酒井式描画指導法」などを参考にした)

② 実際の様子

ア 絵日記のタイトル

表14 各クラスの絵日記タイトル

αクラス	βクラス
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 夏だ「音」(ね)!</li> <li>○ 近所の夏</li> <li>○ 擬音で感じる夏</li> <li>○ 夏を食べる</li> <li>○ 夏の「色」</li> <li>○ 小さな夏、つかまえた!</li> <li>○ 夏の謎</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 耳をすませば夏</li> <li>○ 暑と涼</li> <li>○ 夏をひとつまみ</li> <li>○ なつミッケ!</li> <li>○ こんなところにも夏が</li> <li>○ 音の夏</li> <li>○ 夏といたら</li> </ul>
など	など

イ 絵日記(表紙)



図4-1 夏の体験に着目したもの



図4-2 夏の色に着目したもの

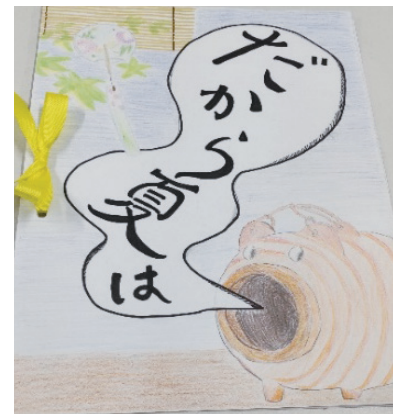


図4-3 夏の服装に着目したもの

ウ 絵日記(本文)

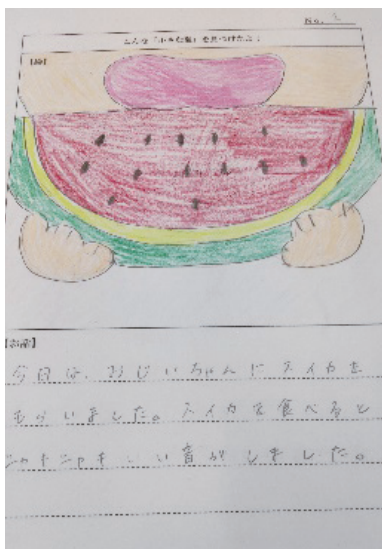


図5-1 食べ物に着目したもの

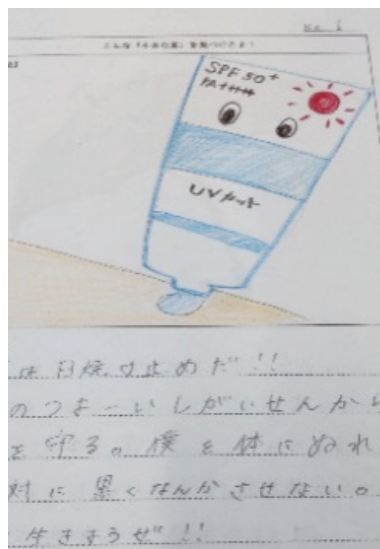


図5-2 日差しに着目したもの

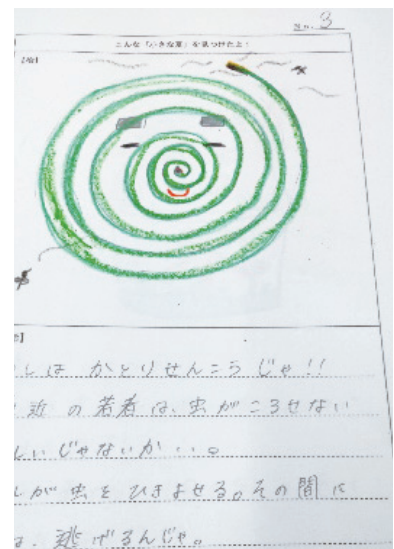


図5-3 蚊の出現に着目したもの

③ 活動後の気付き

表15 活動後の学生の気付き

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 何気なく見過ごしていた生活の中に季節が入り込んでいろいろな発見ができた。</li> <li>・ 変化に着目すると見えてなかったものが見えてくるのが分かった。</li> <li>・ 今までいかに季節を見逃していたことに驚いた。</li> <li>・ 男と女で夏の感じ方が違うことが分かって面白かった。</li> <li>・ 少し季節を気にしながら見ると普段の生活が楽しくなりそうだった。</li> <li>・ 季節の変化に合わせて私たちの暮らしも変化しているんだなあと感じた。</li> <li>・ 今までは冬の方が好きだったけど、ちょっぴり夏も好きになった。</li> <li>・ こんどは秋や冬など、他の季節で「小さな季節」を探してみたい。</li> <li>・ これからは季節の変化を自分の暮らしに取り入れてみたい。</li> </ul> <p>&lt;表現方法&gt;の工夫について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 題名にもユニークさが出せることが分かった。</li> <li>・ ストーリー性を持たせると面白くなることに気付いた。</li> <li>・ 文末表現を統一すると（「やっぱり夏はこれですね」など）落ちがあって面白い。表紙の「色」遣い（赤や青の原色）にも夏を感じるようになった。</li> <li>・ 絵よりも文章の方が難しかったが、いろいろな表現方法を身につけたい。</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>
---

○ 絵日記という表現方法に当初は戸惑う学生も多かった。とりわけ「絵」を描くことに苦手意識を持つ学生が多く見られた。生活科で「絵」をかくことは図画工作科とは意味合いが違う。生活科で「絵」を描くことはあくまでも「振り返り」の一つの手段である。しかし、多くの学生は自分の「絵」の稚拙さ、未熟さを気にするあまり、「絵」に気付きを表現する活動そのものに尻込みをしてしまうようである。自分のユニークな気付きを文章だけでなく「絵」でも表すことができればより深い学びが期待できる。そこでこうした「絵」に苦手意識のある学生に対しては全体的な構図ではなく、自分が一番気になったものだけに焦点を当ててそれを「大きく」（スペースからはみ出すくらいの大きさ）描くよう助言することなどが効果的である。

(4) 明日へジャンプ

第3階層に位置付けられた「自分自身の生活や成長に関する」内容に関する体験活動を生活科研究の最後の一つに取り上げることは、生活科のイメージをより鮮明なものにする上で妥当である。なぜなら「自分自身」を学習対象として取り扱う教科は生活科しかなく自分の成長を実感し、これからの成長に願いをもち、意欲的に生活していこうとする姿こそ教科目標に掲げる「生活を豊かにしていく姿」であるからである。現場においても生活科を学ぶ最後の単元として2年生の学年末に実施しており、自分が生まれてから今日まで（2年生）の成長の足跡を辿り、その間に多くの人々との関わりに気付く中でこれからの自分の成長に自信をもち意欲的に生活していこうとする姿を目指している。本授業を履修する学生はほとんどが20歳前後の若者である。振り返る年数には大きな違いがあるが、この先の人生に自信をもって臨み、今後自立した生活を送っていこうとする生き方を追求することの大切さには変わりはない。そこで本単元では、前単元で「目に見えにくい」季節の変化をとらえる学習したことを活かし、季節以上に「目に見えにくい（とらえにくい）」自分のこれまでの成長を探ることを通じて、この先も周りの多くの人々や、自然などと適切に関わりながら自立して姿を目指したい。

本単元のねらいと学修の流れ、及び①活動の工夫、②実際の様子、③活動後の気付きは以下の通りである。

表16 本単元のねらい

- 自分の人生を振り返り、これまでに多くの人々や自然などと大きく関わってきたことなどをアルバムにまとめる。
- アルバム作りを通してこれまでの自分の成長に自信をもち、この先も自立した意欲的な生き方をしようとする。

表17 本単元の学修の流れ

- <第1時> 自分のこれまでの人生の中でどんな出来事（エピソード）があったかを振り返る。
- <第2時> 出来事（エピソード）順に自分のこれまでの人生をアルバムにまとめる。
- <第3時> アルバムの最後に「これからの自分」宛てにメッセージを書き、この先の自分の生き方を思い描く。

### ① 活動の工夫

#### ア 出来事（エピソード）はスナップ写真ふうにしなす！

これまでの20年近くの自分を振り返ることは容易ではない。そこで、これまでの自分の人生の中で起こった「10大ニュース」を掘り起こすところから授業を始めた。もちろん中には10個程度の出来事が見当たらないケースも見られたが、友だちのエピソードなどを参考にしながら数を増やしていった。（最終的に7～8個で留まる学生も数名いたがそれでよしとした）そして今回は一つ一つの出来事を「スナップ写真」ふう一枚の絵で表現させた。先回の「小さな夏を見つけたよ」では絵日記という絵と文章でまとめさせたが今回は絵による表現の習熟をねらった。学生も絵日記によるまとめ方を経験したばかりなので前回ほどの抵抗感はなかったようである。また絵に対する抵抗感を和らげるために今回はスナップ写真のスペースを少し狭くし、より焦点化させるためにスナップ写真のタイトルをそれぞれ明記させた。

#### イ アルバムは絵巻物ふうにしなす！

一般にアルバムは1ページずつめくって見るものであるが、今回は各ページを蛇腹状につなげ合わせ、伸ばせば全体が一枚の絵巻物になるようにした。自分の人生を「長さ」で視覚的にとらえさせることは活動を活発化させる大きな誘因である。体の大きさとか、人生の長さなど「目にみえにくい」自分の成長を視覚的に把握させることは効果的である。

A4サイズの色ケント紙を横に12枚（表紙と裏表紙を合わせて）並べると約3mを優に超す長さとなる。

#### ウ これからの自分宛てにメッセージを書く！

よりリアルにこれまでの自分の人生を振り返ることができるよう、表紙裏には「これまでの自分」宛てに「お久しぶりです。元気でしたか？これから一緒にこれまでの思い出旅行に出発しましょう」などといった招待状を書かせた。そして裏表紙にはエピローグとして「この先の自分」宛てにメッセージを書かせた。この先、自分がどんな生き方をしていくかは誰にも分からないが、今思う自分のこれからの生き方を「この先の自分」宛てに伝えることは、よりリアルに自分の生き方を思い描かせる上で効果的である。

#### エ プライバシーを守るには？

これまでの活動の中で今回の「自分の成長を振り返らせる」活動は、その振り返らせ方に配慮する点がある。それはプライバシーの確保についてである。自分の成長を様々なエピソードを用いて表現し、それをアルバムとしてまとめてきたが、その一つ一つの内容には極めてプライベートな内容を含む可能性が高い。現場においても自分の成長にまつわるエピソードを家族や身内の人から聞き出すことが多いが、その内容には十分配慮する必要がある。これまで見てように自分の取組を振り返らせる方法として相互に鑑賞

し合うことは自分だけでは気付かなかったことに気付いたり、表現方法の多様性などを知ったりする上で有効であるが、「自分の成長を振り返らせる」活動の振り返りには十分な配慮が必要である。

こうした点を踏まえた振り返りのさせ方としては作成したアルバムをすべて見せ合うのではなく、アルバムを通じて自分が一番人に伝えたい内容をピックアップしてそこだけを発表させたり、アルバム作りを通じて一番伝えたい人を限定してその人宛てに手紙などを書いたりする方法が考えられる。

今後はICT機器などを活用した振り返らせ方の工夫（PCでアルバムを作り、見せたい相手を限定してアルバム情報を送信するなど）もあるだろう。

② 実際の様子

ア アルバムのタイトル

これまでの各実践同様、作品に愛着を持たせる上で自分のアルバムには名前を付けさせた。回を重ねるごとにかねらのユニークさ、ユーモア度も確実に向上してきたようである。

表18 各クラスのアルバムタイトル

αクラス	βクラス
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 私の人生のピースたち</li> <li>○ 7305日</li> <li>○ 私の旅路</li> <li>○ 生きてきただけでえらい！</li> <li>○ 人生は分かれ道</li> <li>○ これまでのわたしとこれからの私</li> <li>○ 苦手だった「お豆腐」が食べられるようになるまでの思い出</li> <li>○ ステップアップ</li> <li>○ 王道を征く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 喜怒哀楽story</li> <li>○ 日々是気付</li> <li>○ 7000日分のフィルム</li> <li>○ ほくの奇妙な冒険</li> <li>○ 20年間ぎゅっと凝縮アルバム</li> <li>○ いつも夢を見ていた</li> <li>○ 記憶のかげら</li> <li>○ 人生のターニングポイント</li> <li>○ 涙あり、笑いあり、汗あり！</li> <li>○ 明日の君へ</li> </ul>

イ アルバム作品（表紙）



図6-1 ポップ調で表現したもの



図6-2 イラスト風に表現したもの

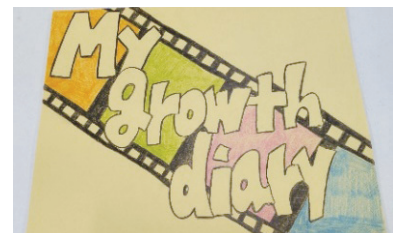


図6-3 写真形式で表現したもの

ウ アルバム作品（台紙）

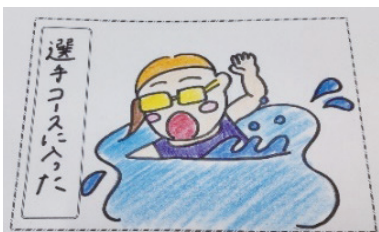


図7-1 習い事に着目したもの



図7-2 ケガに着目したもの

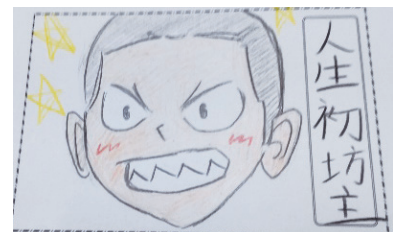


図7-3 頭髪の変化に着目したもの

そして、アルバムの最後のページには、これからの自分の成長に夢や希望を持たせたいと願い「将来の自分」宛てにメッセージを書かせた。

表19 将来の自分宛てのメッセージ

- ・ どうでしたか？あなたが思ってた通りの人生でしたか？これまでの私を成長させてくれたのはきっとこれまで経験したいろいろな出来事や出会った多くの人たちだったんだなあと思います。これからも辛いことや楽しいことなどいろんな経験をしてどんどん大人になっていくんだなあと思います。たくさんの日々を重ねて濃い人生を送ってくださいね。
- ・ どうだった？思ってた通りなんてことはないはず。振り返ってみるとこれまでよりも自分に自信が持てた気がするよ。こんな成長ができたのも今まで一緒に歩んできた家族や友だち、これまで頑張ってきた自分のおかげだと思います。これからどんな道に進むにしても自分らしく努力できるよう日々明るく頑張ってくださいね。

など

### ③ 活動後の気付き

表20 活動後の学生の気付き

- ・ 自分の歴史を振り返りて改めてアルバムで表現する作業は恥ずかしいところもあったが新鮮で面白かった。
- ・ 自分の周りを大切にすることで、この先の人間関係や自分の心の整理に役立つと思った。
- ・ 過去の自分に問いかけたり、未来の自分にこれからどんな自分でいたいかを伝えることは面白かった。
- ・ アルバム作りをすることで、自分を支えてくれた方々への感謝の気持ちと自分のこれからの自信がもてて意味のある学びができた。
- ・ 自分がこれまで歩んできた道を知ること、これからの人生をよりよいものに成長させることができると感じた。
- ・ いろいろ辛いことがあってもここまで乗り越えられてきたことを思い出させてくれた。これから先も辛いことがあると思うけどそんな時は過去の自分を振り返ってみようと思った。
- ・ 自分の置かれている環境が恵まれていることに感謝しなくちゃなと思った。
- ・ 楽しい思い出を忘れないようにするだけでも自分の人生がよい方向へ進んでいくと思った。
- ・ 伝え合う活動をする上で、プライバシーを確保するには様々な配慮をする必要があることが分かった。

など

- 本単元は現場で行われている体験活動を、対象を20歳前後の学生に当てはめて実施したものである。2年生の子どもたちをこれから始まる3年生の学校生活によりスムーズに繋げていくことを目指した単元であるが、学生の気付きを見ると20歳前後の学生たちにとっても改めて自分のこれまでの人生を振り返り、そこからこの先の自分の人生をさらにステップアップさせていこうとする気持ちが高まったようである。

## 4 学生の学び

### (1) 学びの中身

4つの体験活動を通して学生は何を学んでいったのかを授業後のアンケート結果及び振り返りの記述内容から探っていきたい。

① 多くを学べた体験活動はどれか？

15時間目の授業で学生に今回取り上げた4つの体験活動の内、多くを学べたと達成感を実感した活動上位2つを選ばせた。その結果は以下の通りであった。(aクラスとβクラスの合計)

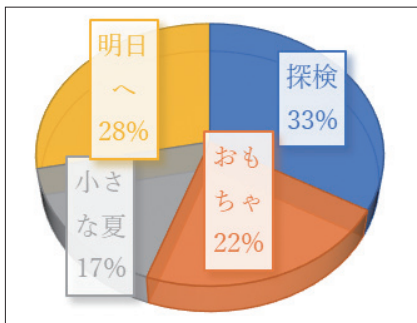


図8 4つの活動ごとの達成感の割合

支持率の割合で見ると「家の周り探検」が33%、次いで「明日へジャンプ」が28%、「動くおもちゃを作って遊ぼう」が22%、「小さな夏を見つけたよ」が17%と続いている。33%と17%では多少開きがあるものの、4つとも支持率17～33%の範囲内に収まっており、支持率に関しては特に大きな差異は見られなかったが、「家の周りを探検しよう」と「明日へジャンプ」が上位二つに入った結果の要因などについて若干の考察を加えたい。

まず「家の周り探検」が一番支持率が高かった主な要因である。これは先の各活動体験ごとの中でも触れたことだがコロナ禍という社会的状況と密接な関連があったのではないかと考える。コロナ禍による「外出行動の制限」は学生生活にも大きな影響を及ぼしている。外出が制限されるということは人との関わりをはじめ、様々な社会環境、自然環境との関わりが遮断されることを意味している。その結果、生活そのものが内向きとなり、見慣れているはずの家の周りとのかかわりも希薄にならざるを得なくなる。こうした状況の中で今まで家の周りにはあったはずの宝物を探し出すという活動は学生にとってもある種の開放感を伴った体験活動になったものと考えられる。

もう一つの要因としては、探検活後に位置付けた付箋による鑑賞活動が挙げられる。コロナ禍の影響で学生は学生同士における人とのかかわりも強く制約されている。とりわけ本授業の受講生である2年生は入学当初から遠隔授業の導入などコロナ禍を前提とした学生生活を余儀なくされてきており、人とのかかわりが希薄である。そうした中、付箋による相互評価活動は、こうした学生にとっては自分の思いを直接他者へ伝えるとともに、他者の思いが直接伝えられる手段として受け止められたのではないかと考える。もともと付箋による相互評価活動は自分の作品に対する評価を視覚的な「量」で捉えられるものとして取り入れたものであるが、コロナ禍という特殊な状況が、鑑賞活動の新たなよさを引き出したものと言えるかも知れない。

一方「明日へジャンプ」が二番目に高い支持率を獲得した要因としては、この体験活動を実施する時期が受講生の多くが20歳前後を迎える時期と合致したことが考えられる。生活科が目指す低学年の子どもにとっての「自立」は、20歳前後という成人になった彼らにとっても極めて大きな、現実的な課題となっているのではないかと考える。真の「自立」とは一直線的に到達できるものではない。人は生きていく中で様々な壁に直面する中でその都度行ったり来たりジグザグ道を経ながら「自立」していく。学生時代こそ、様々な壁にぶつかりながらそうした真の「自立」を目指して苦悩する時代であろう。こうした点からすれば、まさにこの時期に、改めてこれまでの自分の生き様を振り返り、これから先の「自立し生活を豊かにしていく」自分を思い描く活動は学生にとって多くのことが学べる有用な機会となったに違いない。「1/2成人式」といった取組が多くの小学校で実施されているが、こうした「自立」を目指す取組は大学生時代を含めた適切な時期に繰り返し繰り返し実施されることが望まれる。

また文章と絵による表現活動でまとめた「小さな夏を見つけたよ」と比較して「明日へジャンプ」はスナップ写真に見立てた少し小型の絵を描く表現活動は学生には慣れも加わりハードルが下がり、取り組みやすかったものと考えられる。「小さな夏を見つけたよ」の支持率が17%と他と比べてやや低めだったのも、文章と絵による表現活動に対する苦手意識が影響を及ぼしているとも考えられる)

② 彼らは何を学んだか？

では彼らはこれら4つの体験活動を通じて、何を学んだのか。15回目の授業でこの「生活科研究」を通

して学んだことを振り返った記述から見ていきたい。学生の振り返りの内容は多岐に及ぶが大きく「生活科の意義」と「表現活動による振り返りの大切さ」という二点に絞って見ていく。

表21 「生活科の意義」に関わる記述

- ・ 生活科とは子どもたちが生きていく上で大切な教科だと思う。
- ・ 子どもに一番寄り添った授業が生活科だと感じた。
- ・ 身の回りにある普通のことが教材となる教科で、生活科の教科書は子どもを取り巻く全ての事柄である。
- ・ 15回の授業で完成させた作品は今までの自分の足跡であり、宝物だと思う。生活科研究の授業を通じて今までの自分と向き合うことができたととてもよかった。
- ・ 生活科とは普段生活している中で見逃してしまうようなものに目を向け、その美しさにふれ、周りのだれかと共有し共感できる楽しさを味わうことができる教科だと感じた。
- ・ 生活科は固定概念を覆すような、みんなの考えを尊重するような素敵な授業だと改めて思った。
- ・ 生活科は周りを巻き込む学修だと思った。
- ・ 生活科では学んだことを日常生活にどのように活かして繋げていくかが重要だと思った。
- ・ 生活科はここまで深く多様な学びを得ることができる教科だと感じた。
- ・ 生活科は単体ではなく、いろいろな教科と混ざり合って成り立っていると思った。学校生活には欠くことのできない教科であり、自分で考えて行動できるチャンスを作ってくれると思う。
- ・ 子どもたちの感性を伸ばす唯一の教科だと思う。

など

表22 「表現活動による振り返りの大切さ」に関わる記述

- ・ 活動が済んだらそれでおしまいではなく、振り返りをするとところまでが活動なんだと分かった。
- ・ 表現することの難しさ、大変さだけでなく、他の人の作品を見て感動したり学んだりしたことが多く、たくさんの刺激を受けた。
- ・ 表現の仕方によって面白さが変わるし、自分で何かを見つけて感じる事が大切だと知った。
- ・ 生活科の授業では相互鑑賞することが大切だと学んだ。
- ・ 生活科は自分の取組を振り返ることで自分の質を高め、自分と向き合う授業だと気付いた。そうすることで新しい発見があり、子どもには必須な授業だと感じた。
- ・ 自分で感じたことを他の人と共有し鑑賞することにより、自分以外の感性や表現と比べ合うことで新たな学びを得ることができ、自分の学びをさらに深めていくことにつながると思う。

など

以上の記述からは、彼らが生活科は自分を取り巻く身近な「生活」との関わりを大切にしていること、今までそこにありながらあまり見えていなかったものに気付く感性を大事にしていること、他教科との合科的・関連的な指導の核となることなどについて学んでいったことなどが読み取れる。

また表現活動による振り返り活動についても、とりわけ他者との相互評価（鑑賞）を通じて自分の活動を振り返ることで、子どもは様々な新たな気付きを得ることができ、それにより子ども一人一人の学びがさらに充実していくという、主体的な学びから深い学びへの具体的な道筋についてもおぼろげながらも実感してとらえることができたことが読み取れる。

## (2) 学びの展開（生活科指導法との繋がり）

「生活科研究」の学びは、この後に続く「生活科指導法」の学びに繋がっていく。では「生活科研究」

の学びは「生活科指導法」の学びに向けてどう展開していくのだろうか。今後の「生活科指導法」をより意義ある学修となるようにするために「生活科研究」を通じて彼らが身に付けた「学び方」について見ていきたい。ここで言う「学び方」とは授業に臨む構えや今後の授業に対する展望のことである。ただ今回、こうした「学び方」に絞った聞き取りやアンケートは実施していないので、先の15回目の授業で書かせた「生活科研究」で学んだことを振り返った記述内容の中から探っていくこととする。

表23 「学び方」に関わる記述

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 15回の授業を通じて完成させていくつかの作品は今までの自分の足跡であり宝物だと思う。生活科研究の授業だけは今までの自分と向き合う時間となってとてもよかった。</li> <li>・ 様々な活動を通じて本当の自分を見つけることができ、自分の気持ちに素直になれた気がする。</li> <li>・ 一つ一つの活動をしていく中で、ただただそれを楽しんでやっている自分がいて単純に自分が楽しんでこの授業を受けていた。</li> <li>・ 製作活動は大変だったけど、毎回新しい発見ができる授業だった。今まで気付かなかったことに気付くことができ楽しかった。</li> <li>・ この授業は今まで知らなかった「気付き」をたくさん感じ取ることができた充実した時間だった。</li> <li>・ この授業では自分一人で学ぶのではなく、仲間と一緒に学ぶ大切さに気付いた。</li> <li>・ この授業では自分の中にある「好奇心」が発揮できた気がする。きっとこの気持ちが授業に真剣に向き合うためには大切なことではなかったのかと思う。授業が終わっても「好奇心」だけはこれからもずっと大事にしたいと思う。</li> <li>・ この授業を通じて想像力と発想力が鍛えられたと感じた。</li> <li>・ 子どものことを一番考えて授業をしていくことの大切さを知った。</li> <li>・ 授業を通じて自分の成長を感じた。将来教師になったら子どもにも深く学ぶことができる授業がしたいと思った。</li> <li>・ 生活科の授業はこんなに深い想い、願いと目的があったことを知ることができ、とても有意義だった。よりよい生活科の授業ができる先生になりたいと思った。様々な気付きを大切にしていきたい。</li> <li>・ 「気付き」の位置付けはとても難しい問題で、教師になったら自分なりの考えを出せたらいいなと思う。</li> </ul>	<p>など</p>
---	-----------

### ① 授業に対する構え

上記の記述に見られる「授業に対する構え」につながる表現としては「自分と向き合う」「自分の気持ちに素直になれた」「単純に自分が楽しんで」「充実した時間だった」「仲間と一緒に学ぶ楽しさに気付いた」などが挙げられる。

「自分と向き合う」「自分の気持ちに素直になれた」という表現からは自分事として授業に臨んでいる様子が、また「単純に自分が楽しんで」「充実した時間」という表現からは没頭して授業（活動）に臨んでいる様子が窺える。さらに「仲間と一緒に学ぶ大切さに気付いた」という表現からは仲間との関わりを楽しみながら授業に臨んでいる様子を読み取ることができるであろう。こうした自分から進んで活動に取り組み、その活動に没頭し、仲間と関わることの大切に気付きながら、その活動の楽しさを味わっている姿は生活科が目指す子どもの姿と一致する。こうした学ぶ姿を是非とも次の生活指導法の学びに繋げていきたいと考える。

### ② 今後の授業に対する展望

生活科研究は学習者としての子ども側に立って生活科を学ぶ授業であるが、上記の記述の中には既に指導者側に立って生活科指導に臨む構えの萌芽が見られる。「子どものことを一番考えて授業をしたい」



「深く学ぶことができる授業がしたい」「よりよい生活科の授業ができる先生になりたい」「気付きに関して自分なりの考えを出せる教師になる」などの表現は自分を生活科学習の指導者と重ね合わせた表現であり、それは自分の目指す指導者像である。

また中でも「好奇心」「想像力」「発想力」といった表現が見られることに注目したい。なぜならこれらは今後目指すべき教師像に迫るために身に付ける必須要素だからである。

何事にも好奇心をもって臨み、豊かな想像力と鋭い発想力をもって授業を構想できる教師は生活科教師にふさわしい。漠然とした想いではなく、こうした具体的な想いをもって次の生活科指導法の授業に臨むことは、生活科指導法の授業の質を高めていく上で極めて望ましいことである。

## 5 終わりに

本科目は教職課程科目の一つであり履修生は学校教育専攻生と保育専攻生（幼稚園教諭を目指す）であるが、生活科指導法は学校教育専攻生だけが受講対象となる。ただ幼児教育を担う保育専攻生にとっては指導法にまで立ち入らなくとも生活科の特色を踏まえて生活科が目指す授業について理解することは意義深い。とりわけ「架け橋プログラム」の議論が活発になってきている現況においては幼児教育と小学校教育のカリキュラムの繋がりを具現化する上で幼児教育担当者の役割はますます重要になっている。幼児教育を終えた子どもがこの先、どんな学びを獲得していくのかその姿のイメージを明確にすることが目の前の幼児に対する指導をより子どもに寄り添ったものにするためには必要不可欠であり、幼児にとってより望ましい教育活動を改善、展開することにも繋がるからである。

また授業内で見られる保育専攻生の学びの特色の一つに表現活動の豊かさが挙げられる。個人差はもちろんあるが全般的に学校教育専攻生に比べて彼らが描く絵は構図的にも色彩的にも「子どもらしい」豊かさが見られる。このことは個人的な資質の差というよりは向き合う子どもが就学前の子どもであるという年齢差に大きく起因していると言ってもよい。そしてこうした保育専攻生の学びは各活動に位置付く「振り返り活動」などを通じて学校教育専攻生にも大きな影響を与えていることは見逃せない。授業の質が授業内容や指導方法とは別に「構成」という授業環境によっても大きく変わってくることの証左と言えよう。学校教育専攻生と保育専攻生という異なる二つの専攻生が受講することによって本授業の質は大きく向上したものと実感する。

今回、改めて15回にわたる生活科研究の授業を振り返り、4つの体験活動を通じて学生が何をどう学んでいったのかをまとめてみた。ここに示した授業展開は過去4年間の中で幾度となく変更、訂正、改善を繰り返してきたものであり、この先もそうした作業は尽きることはない。それは決して楽な作業ではないが、よりよい授業作りには避けては通れぬ必要不可欠な試練の一つである。

今後は本学のカリキュラムは学生数の減少など現実的な社会変化の動向を受けて変遷していくであろう。また生活科も創立以来30年以上の時を経て大きく見直されていくに違いない。しかしそうした変化に対応しながらも一人でも多くの学生が、子どもの発達特性をしっかり踏まえて目の前の子ども一人一人の学びに寄り添い、子どもと一緒に学び続ける生活科の楽しさ、奥深さを実感できるよう授業の改善、充実を図っていきたいと思う。

そして今後も本授業を通じて一人でも多くの学生が、楽しみながら授業作りに励み、ユニークでユーモアあふれる子どもを育てていける教師として成長いくことを切に願っている。

## 6 参考文献

- 有田和正 (1996) 『生活科で育てる新しい学力』 明治図書  
有田和正 (1997) 『授業は布石の連続』 明治図書  
有田和正 (1997) 『教育技術は人柄なりや』 明治図書  
有田和正 (1999) 『21世紀の学力・学習技能』 明治図書  
片上宗二 (1995) 『オープンエンド化による生活科授業の創造』 明治図書  
嶋野道弘 (1996) 『生活科の子供論』 明治図書  
高木展郎 (2015) 『変わる学力、変える授業』 三省堂  
田村学 (2018) 『深い学び』 東洋館出版  
那須正裕 (2018) 『資質・能力と学びのメカニズム』 東洋館出版  
文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領解説生活編』 東洋館出版